

「読む」ことに重点を置いた辞書指導

——『ジーニアス英和辞典 第3版』を使って



堀内秀俊

1. 辞書指導の段階的動機づけ

辞書指導の第一段階は、新出語義の検索指導である。高校入学後、初めて辞書を手にする生徒もいて、まずは新出単語の意味を探すことから辞書指導を始めることになる。

第二段階には、習熟度にもよるが、生徒の学力のばらつきがある中で、既習範囲の知識から、1つの語における多義性や単語の持つ文法性へのアプローチなどを理解させるための指導を行う。

2. 辞書指導による語法問題演習の奏功事例

2.1 辞書を用いた語法指導

辞書指導を通して導入する文法事項の1つとして、形容詞の叙述用法と限定用法を考えてみる。

到達目標は、以下のような語法問題の解法を辞書指導を通して見出し、ターゲットの理解を定着させることである。辞書を読むことで語法問題の解答を発見し、その理解を深めさせるのである。

- (1) Don't wake up the () dog.
① asleep ② sleep ③ sleeping ④ slept
- (2) The baby is sound ().
① asleep ② sleep ③ sleeping ④ slept
- (3) He is one of the greatest () musicians.
① asleep ② alive ③ awake ④ living

(1)は限定用法、(2)は叙述用法を伴う基本的な問題、(3)は大学入試などに頻出する応用問題である。

中学校の既習範囲である形容詞は、高校英語においては限定用法と叙述用法についてより明確にし、定着させることが課題である。すべての形容

詞を両用法で用いることができると勘違いしていることもあり、用法とともに形容詞が個別に持つ特性も辞書指導でしっかりと押さえない部分である。

高校でも既習したことを踏まえて、その復習として形容詞の2つの用法を問うと、ほぼ用法名は解答できる。次に、念のため、それぞれの用法の用例で何用法かを聞いたり、形容詞の修飾関係などについても確認する。ここで一区切りである。

2.2 問題解法へのアプローチ

とは言っても、用法の名称を覚えているということと実際の英語における形容詞の運用を理解できているかということは別問題である。そこで、実際の問題演習によって定着を図る。習熟度により、(1)は例題として扱う場合と生徒に自力で解答させる場合があるが、ここでは例題として扱う。

この問題では、名詞の前置修飾として分詞形容詞の生起可能性があることに気づけるかどうかが鍵である。ここで、形容詞の用法の問題と明示して(1)の例題を提示しても、似たような綴りの選択肢に戸惑う生徒も多い。形容詞の用法の名称は答えられても、実際に英語の中でどのように形容詞が運用されているか、理解が定着していないためである。ヒントとして、どのような状態の犬を起こしてはいけないのかを考えさせ、形容詞の生起可能性を示唆する。選択肢②は品詞的に不可、選択肢④は分詞形容詞としては生起可能性があるが、意味的機能として不可である。ここからが、辞書指導の腕の見せどころとなる。



2.3 辞書の中に解答を見つける

実際、ここで残された2つの形容詞のように、表面的にも意味的にも類似した語群からの選択では、生徒は戸惑うことが多い。最終的に語群選択をさせる際には、何らかの決定的根拠が必要である。(1)においても、最終的に形容詞が生起することが何とか理解できたとしても、残る選択肢の二者択一にまだ迷うこともある。結局のところ決定的要因は、どちらの形容詞が限定的に用いることができるかである。辞書を調べる際に、語義だけに目が行き、辞書の記述をよく読まない、せっかく解決の糸口が辞書に書かれているにもかかわらず、その重要な記述を見落とすことになる。

sleeping を調べさせると、

〔形〕〔限定〕〔後にくる名詞に強勢を置いて〕眠っている、… ◆ (1) 叙述的には asleep. …

とあり、asleep を調べさせると、

〔形〕 (φ比較)〔叙述〕1 眠っている (↔ awake) ; …

とある。ここで語義だけでなく語法記述にも着目させると asleep は叙述用法なので不可であり、よって解答は限定用法の③となることが分かる。辞書をよく読めば問題の解答が見つかるのである。

2.4 さらに辞書をよく読む

同様に(2)でも反復させる。(2)は(1)の延長線上にあり、解答は叙述用法の①である。根拠は(1)に準ずる。が、ここで一難去ってまた一難である。(2)でつまづくのは、sound である。sound はどうしても名詞や動詞としての既習度が高いため、副詞の sound の用例に生徒は初めびっくりしてしまう。sound の意味を質問しても、生徒が慣れないうちは「音」や「音がする」という答えが多い。

ここで形容詞が叙述的に用いられていることが理解できたので、今度は形容詞に前置され得る要素が何か、すなわち形容詞を修飾し得る品詞が何かを考えさせる。品詞として副詞が思い浮かんで

も、やはり副詞という -ly 形という先入観が強いせいか、なかなか sound が副詞というイメージが定着しないようである。

そこでまた sound を調べさせると、

〔副〕〔通例 ~ asleep〕ぐっすりと、十分に (soundly)
 Ⅵ He fell ~ asleep. 彼はぐっすりと眠り込んだ。

とある。ここには直接的な解答とも言える、語法記述や用例までもが示されている。

これが、高校英語らしい、既習範囲の知識から一歩進んだ語の多義性や、単語の持つ文法性へのアプローチのための辞書指導である。

そして仕上げに(3)である。(3)は実は非常に単純な問題で、限定的に形容詞が生起するので、解答は限定用法の④である。解答は1つしかないことを理解させる。

3. 読むことに重点を置いた辞書指導

(3)の問題では、習熟度が進んでくると次のような質問が出ることもある。「alive は限定的にも使われるから、問題の解答が違うのでは」。「確かにその通り、よく勉強していますね」とほめてあげたくなるが、(3)では alive が限定的に用いられる場合の語義では不自然になることから、やはり解答は④しかないのである。

alive を調べてみると次のように記されている。

〔形〕〔叙述〕… 2 <人・記憶などが> 生き生きして… Ⅵ She was [looked] still very much ~ for her age.
 … **〔語法〕** この意では限定用法に用いることもある。
 通例修飾語を伴う：She is a really ~ student.

辞書指導では、特にこのように「読む」ことに重点を置きたい。語義を引くだけでは、本当にその語を理解したことにはならないのである。

既習知識が広がること、英語の実際の運用の語感がつかめること、個々の単語が持つ特性を体系的に捉えることができるなど、辞書をよく「読む」ことで英語の深い理解ができるのである。

(ほりうち ひでとし・Royal Academy 教諭)